

昭和初期の「新しい祭り」

— 京阪神の事例から —

阿 南 透*

はじめに

現代日本で数多く見られる「祭り」には、「市民祭」「商工祭」「〇〇（地名）まつり」「ふるさとまつり」等の名称で、市役所や商工会議所などが主催する、いわゆる行政主導のものが数多く見られる。

こうした祭りについては、社会的意義についての研究は盛んであるが、それらが日本ではいつから始まり、一般化していったかを全国的に俯瞰した研究はない。

私は、こうした祭りが最初に頻出する時期を、昭和初期、具体的には1930（昭和5）年から1937（昭和12）年と考えている。その理由は別稿に委ねるが、本稿ではこの時期に京阪神で相前後して作られた3つの大規模な祭り、京都の「染織祭」、大阪の「商工祭」、神戸の「みなとの祭」を取り上げる。このうち、染織祭と商工祭は戦前で終わり、みなとの祭も1969年をもって終了したため（神戸まつりに発展的解消）あまり知られておらず、資料も必ずしも十分には残されていない。このため、成立過程を十分には明らかにし得ないうらみがあるが、新聞記事を援用しながら3つの祭りを紹介し、内容の特徴を明らかにするとともに、3つの祭りを比較することで、この時期の祭りに見られる特徴を考察したい。本稿はこうした試みを通じて、「近代祭礼史」を描き出すための第1歩である。

第1章 染織祭

1. 計 画

染織祭は、1931年に京都で始まった祭りである。この祭りの計画は1930年8月から始まったとされている。染織祭終了後に山本花魂が祭りの記録として編集発行した『グラフ染織祭』の「解説」には「染織祭の計画は昨秋日本染織物見本市協会理事者間に於て協議され、これより先、八月末丹後縮緬宣伝大会当時津原組長及丹城（安藤商店）桑原（吉田忠）矢守（丸紅）山川（市田）各支配人等と都下新聞経済記者団との懇談会の席上染織京都の発展策として染織祭挙行のことが話題に上ったのが濫觴であろう」[山本, 1931]とある（引用は新字新かなに改めた。以下同じ）。この企ては次のような経過をたどる。「爾来この計画は当業者は勿論有力官民の間に具体化すべく運動された結果、佐上知事、土岐市長、大澤会頭の三頭の手によって公式に発表され、二月二十六日京都ホテルに於て染織代表者参集の上染織祭の主体となるべき染織講社の創立を見るに至」[山本, 1931] った。

すなわち、8月に染織関係者が「染織京都の発展策」として染織祭を提案し、日本染織物見本市協会と協議され、府、市、商工会議所などを巻き込み、京都の町を挙げての行事になったのである。そして2月には祭礼組織としての「染織講社」が設立された。

府と市が関与する理由を『グラフ染織祭』掲載の祝辞から見てみよう。佐上信一知事は「服飾材料の生産額は大略年額十六億円に垂とし、我国産

2006年11月30日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科教授 民俗学

業の重要部門を形成している」と染織業の重要性を述べた後、「染織諸神の祭祀が従来一般には左程重要視されなかった憾あることは、之を否定し得ない」と、行事の意義を述べる。土岐嘉平市長は「京都の染織は其質に於て全国に誇り得るのみならず、その生産額に於ても本市産業の主位を占める重要物産」であり「京都市の大衆的重要産業」だとする。にもかかわらず「市民に最も関係深き染織に関する祭礼の見るべきものなきを遺憾とし、今回時代祭にも比すべき染織祭を創設し」とする。要するに、京都では染織業が重要な産業であり、市民にも関係が深いから染織祭を創設したというのである。市長はさらに「将来時代祭と染織祭とが京洛の地に二大祭典として対立し、前者は平安京を偲ぶ史的式典として、後者は生業を謳歌礼賛する産業祭として、春と秋に行われることは京洛の特質を最も雄弁に物語る祭典であると思うのであります」と述べ、時代祭と染織祭を対比している。

この経緯を他の資料からも見てみたい。『京都市日出新聞』は1月19日付の紙面で祭りの計画を紹介している。それによると、染織物見本市関係者が4月の見本市開催と同時に「呉服祭」の名称で開催すべく協議したとある。1月22日付の紙面では、1月21日に染織物見本市の竹上理事長以下役員と、府、市、会議所から関係者が出席し、第1回協議会を開催したとある。この席で、府、市、会議所が主催、染織関係各組合が後援し、祭典を京都神職会に委ねるという組織形態が決まったようである。ここまでの段階では、見本市関係者が主導し、呉服祭という名称の祭りを企画していたと推測しうる。

2月5日付の紙面では『時代祭』に対抗して『平民祭』を創設か」との見出しの下に、支配階級の風俗を示す時代祭に対抗し、町人の風俗を見せることでコントラストの妙味を示すとのプランを紹介している。2月15日には、名称を呉服祭から染織祭に変更したとある（この時に4月第2土曜日曜の開催が決まったとする資料もある〔京都商工会議所、1931：142〕）。理由は、呉という文字が中国を意味するので、「我国固有の神式を

発揮する上に考慮しなければならない」からであった。3月14日付には「大衆祭新設は今年は駄目」という記事があり、このプランは1ヶ月前に断念されたようだ。その理由は4月11日の社説で、「最初染織祭の計画発表されるや各方面から祭を賑かすための催物の1つとして『大衆行列』の企てを願った。これは現在京都の一名物となっている時代祭、即ち平安朝時代に於ける支配階級の服装行列に対し当時の被支配階級たる所謂町人百姓の風俗を見せ染織祭を一層印象づけようとするもので適切な目論見であったがその服装を調査し整えることが容易でないため遺憾ながら明年の本祭まで延期することになった」（『京都市日出新聞』1931.4.11）と説明している。

すなわち、新しい祭礼を作るにあたり時代祭を参考に、趣の異なる「平民祭」「大衆祭」を考えたものの、準備不足で断念したのである。

なお、時代祭は、1895年に行われた平安遷都千百年紀年祭の行事の1つとして作られた行列である。平安遷都以来千百年の風俗を6つの時代行列（延暦文官参朝列、延暦武官出陣列、藤原文官参朝列、城南流鏑馬列、織田入洛列、徳川城使入洛列）で示すというのが開始当初の姿であった。翌年からは神幸列が加わり、平安神宮の祭礼となつて、10月22日の恒例行事となった〔平安神宮百年史編纂委員会、1997〕。

染織祭の創設を考えるに当たり、この他にも念頭に置いておきたい点が2つある。

第1点は、1931年4月1日に、京都市が伏見市など近隣27市町村を合併し、「大京都市」が実現したことである。この合併の際には祝賀式典と祝賀踊が盛大に行われている。祝賀踊とは、特定の主催者が企画したものではなく、1日から5日までさまざまな団体が自発的に行った催しの総称である。これは警察への届出を必要とするが、そのあたりの事情が「そこ抜けに踊っていい——取締は寛大にする、心得ねばならぬ事項」という見出しの下に掲載されている。その中で、「催物の種類」には、旗行列、提灯行列、屋台及び祝賀踊、自動車又は自転車行列（これだけは昼間だけ）、仕掛煙火、打揚煙火（人家稠密の場所ではならぬ）

の5つが挙げられている。実際はこの中で「屋台及び祝賀踊」が多かったものと思われる。そして記事では「手続」について「屋台の曳行や多人数の団体行列は主催から挙行の前日迄にその住所地所轄警察署に左の事項を届出ればよい(イ)催物の種類、(ロ)催物の概要、(ハ)参加人員、(ニ)挙行日時、(ホ)通過道路、(ヘ)団体名及び行列指揮者住所氏名」(『京都日出新聞』1931.4.1)とする。このように、前日に届けさえすれば気軽に行列を出せたため、実際に多くの行列が出たものと思われる。同日の紙面には3つの例が挙げられている。「下京区朱雀町会、互楽会では十五名の会員がピエロの扮装で醒々井万寿寺を出発(以下コース省略)、松原通堀川西入る北門前町神田卯三郎ほか八十名は長襦袢姿に鳴物入りで松原堀川西入る処を出発(以下コース省略)、千本押小路一帯の友禅工男三十名、女三十名は来る二日から五日まで屋台一台を引きお手の物の揃いの元禄模様の長襦袢で踊り抜く」(『京都日出新聞』1931.4.1)。

この祝賀踊は染織祭の折にも許可されている。新聞記事には「染織祭の踊は編入祝賀と同様」との見出しで、警察は4月12、13日の2日間も祝賀踊と同様の方針で取り締まるとの記事が出ている(『京都日出新聞』1931.4.10)。こうしてみると、4月の祝賀ムードに合わせて染織祭も企画された可能性が推測できる。

染織祭の創設を考えるに当たり念頭に置いておきたい第2点は、4月開催という日程を日本染織物見本市に合わせたのではないかという点である。この見本市は、京都染織物見本市の名で1926年から始まった。京都市の染織物の見本を陳列し、全国の販売業者を招待して売買を行うというものである[京都市, 1981: 661]。この見本市は春秋年2回開催され、1930年からは名称を日本染織物見本市と改めた[高橋, 1944: 356]。見本市関係者が祭りの創設に熱心であったことは既に述べたが、春の回を4月に開催していたので、4月に開催される見本市に合わせて染織祭を実施することが、染織関係者にとっては大きなメリットになったものと推測される。

2. 第1回の内容

こうして4月に第1回染織祭が開催された。

主な行事は表1に示したとおりである。まず第1日は、神社祭祀としての「染織祭」を執り行った。岡崎公園の平安神宮前に仮設した祭場で、染織業の祖神として9神を祭神に定め、降神、祝詞奏上、玉串奉奠、神賑の儀等の宗教儀礼を行った。終了後は一般の参拝があり、午後9時に昇神の儀を行った。

第2日はメインイベントの行列が行われた。これは大きく3つの部分に分かれた。第1部は祭事委員の自動車隊である。具体的には、市長、知事、

表1 第1回染織祭

(『京都日出新聞』1931.4.11, 4.13, 4.14による)

■ 4月11日(土)	
・祭神降神の儀(午後1時)	
・神賑の儀	
・提灯行列(夜)	
・昇神の儀(午後9時)	
■ 4月12日(日)	
○祭神降神の儀(午前9時)	
○大行列	
・第1部	
講社祭事委員自動車隊	
第一工業学校の機織姫模造山車と生徒200名	
・第2部	
1. 西陣織物商組合	80名屋台2台
2. 半襟刺繍組合	80名屋台2台
3. 京都染物同業組合	350名屋台2台
4. 西陣織物同業組合	150名屋台3台
5. 京都縮緬商組合、京都浜縮緬商組合、 京都生絹同盟会、丹後縮緬同業組合	200名屋台3台
6. 京都小売商連盟	60名屋台2台
7. 京都染呉服商組合、関東織物商組合	100名屋台10台
8. 京染呉服悉皆業組合	100名屋台2台
9. 京都木綿商組合	50名屋台1台
10. 白川水洗団	屋台1台
・第3部	
京都市料理飲食業連合組合	屋台2台
伏見協賛団	自動車2台
日活、松竹、帝キネ	男女優乗車自動車5台
日本織物新聞社	屋台1台
京都市消防団	屋台1台
中外染織新聞社	屋台1台
○祝賀踊	
■ 4月13日(月)	
○祝賀踊	

会頭、染織講社理事長と常任理事、その他の委員などがここに加わった。第2部は染織に関連した諸団体の行列であった。屋台を飾り立て、華やかな衣装に身を包んだ行列が人目を引いた（第1部と第2部の間に第一工業高校の生徒が入ったが、これを第1部に含めるか第2部に含めるかは資料により違いがある）。そして第3部は、その他の団体である。コースは府庁前を出発し、丸太町通、烏丸通、四条通、東山通、二条通を経て岡崎の祭場に至るというものであった。

新聞報道を見ると、『大阪朝日新聞』（京都版）は「京都染物同業組合五百余名は揃いの頭巾に、二羽重格子染の着物に紫金染、袖なしの陣羽織に、花で飾った山車二台に美人を乗せて祇園囃しの華やかさ、西陣織物商組合八十名は元禄の花見姿で揃いの衣装で並び、京染呉服悉皆同業組合百五十名は御座船を飾り祇園囃しの山車を引き、薄色陣羽織、元禄着物に無地の烏帽子で勢揃いをなし」とある（『大阪朝日新聞』（京都版）1931.4.13）。また『大阪毎日新聞』の見出しは「遺憾なく発揮した京の着倒れ気分——三マイルの服飾オンパレード」と、「着倒れ」という言葉で表現している。

また、期間中の2日とも祝賀踊が見られた。とはいえあくまで自発的参加である。新聞記事には次のような描写がみられる。「祝賀踊に『町民祭』の賑いを見せ、都踊の紅提灯に灯の入る頃から岡崎公園の祭場めざして伊吹合名会社、丸紅、吉田忠、大橋、市田、安藤その他各店、染織関係青年訓練所の店員が景気よく提灯行列を作って殺到するのをきっかけに雲と集まった群衆に渦巻きをつくって京の染織を誇る華やかな踊衣装の長蛇の列が花車、屋台を惹き祇園囃子で詰めかけ時のすぐにつれて円山公園下は祝賀気分殺気立つ踊りの群れて湧くような雑踏を見せた」（『京都市出新聞』1931.4.13）。

この第1回染織祭は、あくまで準備不足のための暫定的な行事という認識があった。一応の形を整えた第3回染織祭の後に出版された『歴代服装図録』には、第1回染織祭について「然るにこれは全く一時的の行列に過ぎないから、更に染織の特技を発揮し、且つ歴史的意義ある行列を組織せ

んとする儀が起り、同人等にその調査を委嘱せられた」[関他、1933]とある。すなわち、「歴史的意義ある行列」とすべく、祭事調査委員として出雲路通次郎、関保之助、和田不二男、猪飼嘯谷、猪熊浅磨、江馬務の6氏が依嘱され、上古時代から江戸時代までの8つの行列を考案した（ちなみに、ほぼ同じメンバーが、1932年からの時代祭の行列増にも関与し、「豊公参朝列」と「楠公上洛列」の追加を決めている。『京都市出新聞』1932.3.31）。これについては、1932年に1つを先行実施し、1933年からすべての行列が登場することになる。

3. 行事の完成

1932年の第2回染織祭は、第1回とほぼ同じ内容で開催された。変更点としては、行列第2部の染織関係団体の行列に、平安時代の「やすらい花踊」を取り入れたことである。第3部は、その

表2 第3回染織祭
（『京都市出新聞』1933.4.11による）

- | |
|---|
| <p>■ 4月8日（土）
祭典</p> <p>■ 4月10日（月）（9日の予定が雨天順延）
行列</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 祭事委員自動車 2. 幣物自動車 3. 齋員自動車 4. 祭主大森市長 5. 斎藤府知事 6. 田中商工会議所会頭 7. 染織講社理事長伊賀助役 8. 染織講社理事、祭事委員自動車 9. 上古時代 機殿参進（京染呉服悉皆同業組合、島原廓芸妓） 10. 奈良朝時代 歌垣（京都染呉服商組合、上七軒） 11. 平安朝時代 やすらい花踊（関東織物盛奨会、先斗町） 12. 鎌倉時代 女房の物語（京都縮緬・縞縮緬・生絹・丹後縮緬、宮川町） 13. 室町時代 諸織の婦女（西陣織物、北新地） 14. 桃山時代 醍醐の花見（日本染織物見本市協会・京都半襟商・京都刺繍同業・京都木綿商京盛会・京都蚕糸商同業・京都洋反物商各組合、祇園甲部） 15. 江戸初期 京女の晴着姿（京都染物同業組合、祇園乙芸妓） 16. 江戸後期 京女の晴着姿（京都染物同業組合、中書島遊郭） |
|---|

他の団体の行列であったが、ここに前年は不参加であった京都日出新聞が加わった。

染織祭が最初の目論見通りに完成するのは、第3回の1933年である。この年、第1日の4月8日はこれまでと同じ式典が行われた。第2日の行列は、雨のため1日順延し10日に行われた。内容は表2のとおりである（表は『京都日出新聞』1933.4.11から作成した。ただし13番以降の行列に出場する遊郭名の記載がなかったため、翌年の記事から補った）。前半は祭事委員、役員などの自動車行列であり、後半が時代行列である。時代行列は8列あり、それぞれ担当団体が決められていた。実際に衣装を着て行列するのは遊郭の女性たちであった。すなわちこの時代行列は、時代

祭の女性版ともいうべきものになったのである。

ここに完成を見た時代行列は、1937年まではほぼ同じ形で継続する。それとともに新聞報道が少なくなるので細部は不明であるが、同じ内容を毎年繰り返す、行事として安定期に入ったものと思われる。そして1937年夏に日中戦争が本格化したため、1938年からは時代行列が中止になり、1日目の祭事だけが残ったのであった。

第2章 大阪商工祭

大阪商工祭は、1933年に、大阪商工会議所、大阪府、大阪市、大阪実業組合連合会、大阪工業会、大阪商工協会、大阪実業協会の7団体が「大

表3 商工祭執行案

〔高柳, 1933〕を基に作成)

1. 趣 旨
我が大阪経済界の発展に幾多の功績を残して物故せる先覚の霊を合祀すべく年中行事として商工祭を挙行す
A. 祭典 祭壇を設備し商工業先覚の霊を合祀し祭典を挙行す
B. 催物 商工祭の催物として参加人員五百名より成る商工業に関係ある時代風俗行列を主催者挙行す
2. 期 日
11月2日, 3日, 4日の三日間
3. 場 所
大阪城公園, 中之島公園の内より一ヶ所選定す
4. 主催者
大阪府, 市, 商工会議所, 大阪実業組合連合会, 大阪工業会, 大阪商工協会とす
5. 祭典に合祀すべき物故先覚者
府, 市, 各実業団体及び本所合議の上下先覚者選定委員会を設置し同委員会に一任す
6. 商工祭参列者
商工大臣, 師団長, 知事, 市長, 本所会頭を初め其他関係者一同
7. 商工祭記念祝賀会
適當の場所に於いて商工祭挙行後開催す
8. 商工祭行列
第1列 時代風俗行列 第2列 各同業組合の裝飾行列 第3列 市内各商店会社の裝飾自動車隊 第4列 市内各方面の催物隊
9. 商工業に関する展覧会及び講演会の開催
商工祭期間中商工業に関する展覧会及び講演会を市内各所に於いて開催す
10. 商工業に関係ある学校の意義ある催
商工祭期間中は商工業に関係ある学校当局が意義ある催しを為す様学校当局に依頼す
11. 商工祭協賛会の設立
商工祭を有意義に達成せしむる為め商工祭協賛会を設立す
12. 商工祭期間中国旗及び提灯の掲揚
商工祭期間中は全市国旗及び提灯を掲揚し一定造花(天上花)の裝飾を為す
13. 全市の商工祭記念大売出
商工祭期間中は全市記念大売出しを行ふ 卸売=大見本市, 小売商=大売出し
14. 鉄道, 船車等の運賃の割引
商工祭期間中は鉄道, 船車運賃等の割引を交渉し旅客其他に便宜を与ふ
15. 花電車及花自動車の催物
商工祭期間中は花電車及び各商店に花自動車の催物を勧誘す
16. 商工祭協賛記念章又は宝物の発売

阪商工祭協会」を結成して開始した祭りである。

この行事については、1933年の第1回と35年の第2回に、主催者から記念誌が発行されている〔高柳, 1933〕〔武田, 1936〕。ここではそれらに依拠しつつも新聞記事で補足し、行事を概観したい。

『大阪商工祭記念誌』によれば、大阪商工祭の発端は、1933年7月17日、大阪商工会議所の江崎利一が商業部会で提案したことに始まるという〔高柳, 1933: 1〕。商業部会では特別委員会を組織して、16項目からなる「商工祭執行案」を立案した(表3)。それによると、まず第1項で、趣旨として「我が大阪経済界の発展に幾多の功績を残して物故せる先覚の霊を合祀すべく年中行事として商工祭を挙す」とし、先覚の霊を合祀する「祭典」と、商工業に関係のある時代行列を挙する「催物」の2つを挙げていた〔高柳, 1933: 1-4〕。

この案は大阪商工会議所役員会の賛同を得たため、他団体にも協力を呼びかけ、大阪府、大阪市、大阪実業組合連合会、大阪工業会、大阪商工協会、大阪実業協会の賛同を得た。この7団体が8月29日に実施機関として大阪商工祭協会を設立した。会長には大阪商工会議所会頭の稲畑勝太郎、理事長には大阪商工会議所商業部長の森平兵衛が就任した。そして協会内に、総務部、祭典部、行列部、宣伝部、会計部の5委員会を設置して準備を進めた。こうして、明治節にあたる11月3日を中心に、2~4日の3日間の行事が決定した。

第1回の行事として予定された内容を〔高柳, 1933〕を基にまとめた(表4)。同書によると、行事の中心は先覚者の霊を合祀する祭典と商工祭行列である。

先覚者合祀とは、当時の商都大阪の繁栄を生んだ先覚者を讃え、合同で神として祀るというものである。この第1回大阪商工祭では、末吉孫左衛門吉康、淀屋个庵、山中新六、天王寺屋五兵衛、石丸定次、住友吉左衛門友芳、殿村平右衛門(以上江戸時代)、五代友厚、磯野小右衛門、田中市兵衛、藤田傳三郎、松本重太郎、廣瀬宰平、土居通夫、山邊丈夫(以上明治時代)の15名が選ばれた。そして11月3日に、大阪城内に特設され

表4 第1回大阪商工祭

(〔高柳, 1933〕による)

第1日

- ・前日祭
 - 大阪城公園に設けた祭壇で降神鎮座の祭典
- ・商工祭記念商工業大講演会(中之島中央公会堂)
- ・大阪全市の大売出
- ・各種同業組合の提灯行列(大阪商工会議所~大阪
市役所~大阪府庁~大阪城公園)
- ・花火の打揚(中之島公園)

第2日

- ・本祭
 - 大阪城公園祭典場にて商工祖神物故先覚者を合祀
- ・商工祭行列
 - A. 本会主催行列
 1. 豊公入場武者行列
 2. 大名行列
 3. 町人行列
 - B. 各種団体主催行列
 1. 大阪商工協会広告自動車行列
 2. 大阪酒類商同業組合自動車行列
 3. 大阪木炭協会自転車行列
 4. 大阪帽子同業組合行列
 5. 大阪肉商同業組合行列
 6. 大阪洋服商同業組合行列
 7. 大阪菓子商同業組合行列
 8. 大日本連合少年団
- ・商工祭記念祝賀会
- ・大阪全市の大売出
- ・花火の打揚(中之島公園)
- ・空中遊覧飛行
- ・全市小学生旗行列

第3日

- ・翌日祭
- ・青年団提灯行列
- ・大阪全市の大売出
- ・花火打ち揚げ(中之島公園)

た祭典場で、神道式の儀式である「商工祭」本祭のなかで合祀された。

もう1つの中心行事が商工祭行列である。そのうち主催者によるものは「時代行列」の名で一括されている。具体的には、豊公大阪城入場行列(120名)、江戸時代大名行列(50名)、浪速町人風俗行列(120名)の3つがあった。このうち豊公大阪城入城行列は、豊臣秀吉の大阪城入城を模したものである。衣装の考証と指導は、出雲路通次郎、猪熊浅麿、猪飼嘯谷、小西大東という、京都在住の有職故実の権威たちに依頼した。実際に行列する人員は青年団が担当した。江戸時代大名行列と浪速町人風俗行列は、上方郷土研究会が担

当した。なお、この他に「列外行列」として、諸団体の主催する行列があった。こちらの内容は記述がないが、新聞記事によれば「帽子商同業組合のユーモア人形、餅組合の大鏡餅、饅頭菓子組合のつくり物」（『大阪毎日新聞』1933.11.4）が挙がっている。また参加する広告自動車の意匠も「紙上広告行列」として掲載された（『大阪朝日新聞』1933.11.3）。これらの行列は、商工会議所のある梅田を出発、大阪城公園を経て天王寺公園まで、大阪市内の繁華街を通るコースが設定されていた。

ところが3日朝に朝香宮妃が逝去したため、商工祭行列は歌舞音曲を中止し、厳粛な行列が粛々と進んだ。コースも梅田から大阪城公園までで打ち切りとした。また、3日夜には記念祝賀会、4日には小学生旗行列と青年団提灯行列を予定していたが、これらも中止になった。

『大阪商工祭記念誌』にはこの他、4つの花街が廓内で執り行った協賛行事が紹介されている。それによると、それぞれ女性の行列や屋台が練り歩いたが、新町廓では「女装時代風俗行列」と題して女性の風俗の変遷を示し、南地廓では豊公大阪城入場行列にちなみ北政所以下の入城の晴れ姿を模し、北陽新地廓では浄瑠璃や歌舞伎に現れた大阪の女性に扮装した一団が「浪花女粧風俗」と題して練り歩くというように、女性による「時代行列」を意識した行事が行われた。また町内会や小売連合会などでも協賛の催しを行ったという。

翌1934年は開催準備が進み、豊公入城に堂島川を船で渡御する「船渡御」を取り入れる計画で試漕までしたものの（『大阪朝日新聞』1934.8.26）、9月21日に室戸台風が大阪を襲い大被害を与えた。このため行事は取り止めになった（『大阪朝日新聞』1934.9.30）。

第2回商工祭は1935年に開催された。内容は第1回とほぼ同じであった。第1日の行事では、本祭では商工業先覚者として、第1回の15名に加え、安井道頓、河村瑞軒、中井竹山、渡邊昇、日下部平次郎、外山脩造の6名が合祀された。第2日の目玉である行列は、豊公入場行列は前回同様であるが、新たに女儀行列と田楽が登場した。

前者は豊臣秀吉の妻であった寧子と女房たちの行列とされ、後者は住吉田楽を模した女性30名による歌舞であった。これらは南地五花街の考案による女性たちの行列であり、「故実に拠って組立てられたものではないから其の当時のものと異なった点がある」（武田、1936：78）とあるように、着飾った芸妓たちの姿を見せることに狙いがあったようである。団体行列は、各団体それぞれに趣向を凝らした仮装行列であった。この点は第1回と同じだが、参加団体が第1回と大幅に入れ替わっている。

また、自動車行列が独立し、単独の行列となった。これは陸軍の戦車2台を先頭に、飾り立てた自動車約100台が市内を行進し、走行距離は50マイルに及んだ。さらにそれらの自動車の意匠が審査され、10位までが表彰された。

大阪商工祭は、明確には謳っていないものの商工業の振興を目的としていることは確かである。この点について、記念誌には次の記述がある。「商店街では心斎橋筋、戎橋筋、道頓堀方面の第一日の売上げは平日の五倍内外に上った。（中略）平均2、3割方の増収は全市に亘って見られる。公設小売市場54ヶ所二日間の売上合計は21万3,974円で昨年両日の合計16万9,652円と較ぶれば遙かに隔りがある。旭区の一公設市場の回答は、昨年両日売上合計と本年の売出中のそれとは明確に1と2との比を示している。小売業者の所謂商工祭景気は、回を重ねる毎に濃厚に現れて来たのである」（武田、1936：152-153）。また新聞記事では、地下鉄、バス、市電、タクシー、私鉄などの交通機関が予想を遙かに超越した利益を上げた旨の報道がある（『大阪朝日新聞』1935.11.5）。このような記述を見ると、「商工祭景気」を作り出すことに成功したようである。とはいうものの、新聞の投書には「貧弱な商工祭」と題し、「産業都のカーニヴァルという前ぶれにさぞや盛大な祭であろうと期待した商工祭があんに相違して貧弱な祭でありその催物があまりに無意味なものであったのに面食らった」（『大阪朝日新聞』1935.11.5）というものもあった。

第3回は1936年に開催された。内容は前回同

様だが、行列に大阪市連合青年団による維新勤王隊が加わった。また、大阪商工祭協会総務部委員長の藤井満彦は、「今回は特に小売業者の振興対策に重きを置いた」とし、「小売商店街に対しては多額の経費を以て、提灯、大旗等を多数寄贈せられ、売出で氣勢を添えられることになっている」〔藤井、1936：13〕と述べている。商店街の振興という狙いがますます明確になったのである。

しかし、翌1937年7月の日中戦争本格化により、1937年以降の大阪商工祭は神社祭祀のみを執り行った。こうして大阪商工祭は、実質的には3回をもって終わりを告げたのである。

第3章 みなとの祭

1. 計画

みなとの祭は、1933年に神戸市で始まった祭りである。

この祭りについては、アメリカ・ポートランドのローズフェスティバルを参考に始まったとする説明があり〔阿部、1981：16〕、『新修 神戸市史』もその説を採っている〔新修神戸市史編集委員会、2005：821〕。確かに部分的に参考にした可能性は高いと思われるので、具体的な影響関係は別の機会に考察したい。しかし新聞記事にこの点の記載はなく、むしろ他の祭りも参考にしながら、神戸市が独自に祭りを創造していった様子が読み取れる。そこで、ここでは新聞記事を中心に計画の過程を追ってみたい。

神戸市で、市を挙げて行う祭りの計画を具体的に議論し始める時期は、新聞記事によれば1932年1月と思われる。『神戸又新日報』によれば、この年の初春に、鉄道の高架化、区制の実施、「三大事業」（生糸検査所、中央卸売市場、蓮池市民運動場）の完成などから、「これを期してはなばなしい官民共同の祝賀会を催し一景気をあげようとの相談が市内会議所の間で進められてきた」〔『神戸又新日報』1932.1.7〕。このため市の観光委員会でも「委員側から『沈滞した市の景気をおおるためにも是非この催しを実現したい』との希望がでた」〔『神戸又新日報』1932.1.29〕。

さらに黒瀬市長は「ぜひ今年こそは市民祭を設定したい。大阪の天神祭、京都の祇園祭みたくに全市がお祭り気分にあたる機会がないのは神戸市民の物足りなく感ずるところである。一年に一度位は市民がこぞって共にお祝い気分になるのも大都市の市民にとっては必要なことだ」〔『神戸又新日報』1932.1.7〕として、「市民祭」を提唱した。つまり市民祭は、何か祝うべき目的があったのではなく、「市民がこぞって共にお祝い気分になる」ために企画されたのであった。その際、市長は「大阪の天神祭、京都の祇園祭」を念頭に置きながらも、これら神社祭礼の宗教的意義には言及せず、「全市がお祭り気分にあたる機会」として見ている。そして新聞記事によれば、1932年1月から2月にかけて市の観光委員会で議論が進み、参考にすべき行事として京都の染織祭あるいはマニラのカーニバルが挙げられた。特に染織祭については「市当局でも非常にのり気になり早速伊藤書記を京都に派して京都で毎年行うことになっている染織祭の内容を詳細に調査せしめ、その報告を中心に具体的な案をたてることに決定した」〔『神戸又新日報』1932.1.29〕とあり、さらに2月1日の関係課長打合せでは、「経費 追加予算として計上すること、京都の染織祭の例によれば大体市の負担は一万円見当」〔『神戸又新日報』1932.2.2〕と、染織祭を参考に経費を検討している。

2月6日の観光委員会では黒瀬市長の腹案が示された。それによると、祭日は5月の第2土・日で、祭事は第1日を奉告祭、記念祭市民祝賀会、催物行列、第2日を各町の祝賀日にあてる、というものであった〔『神戸又新日報』1932.2.7〕。

この案に対し、「国際都市である神戸市としては他都市にありふれた祭事や報告祭などに重きをおくよりも形式を諸外国人共同の祭事とし外国人を勧誘して各国さまざまの習慣なり風俗なり祭事なりを一般に紹介するのが最も相応しく、また人気を煽るに相当したものではありませんまいかとの意見が有力であった」〔『神戸又新日報』1932.2.7〕と、委員の中から国際都市の強調を求める声があった。このため「県、商工会議所、インターナショナル・コミッティー等の意見を聞いた上で更に練り直

すことになった」という注釈があるものの、「市民祭の催しもいよいよこれで確実となってきたわけである」と記事を締めくくっていることから、内容はともかく、2月の段階で開催はほぼ決定したものである。

また、名称については「みなとの祭」「港湾祭」「神戸カーニバル」（『神戸又新日報』1932.1.29）、「市民祭」（『神戸又新日報』1932.2.2）、「みなとの祭」「かもめ祭」「海港祭」「港湾祭」「扇港祭」（『神戸又新日報』1932.2.7）が候補になった。そしてその中から「みなとの祭」に決まった（『神戸又新日報』1932.2.7）。すなわち、港湾都市神戸のシンボルとしての港を市民祭の名称に選んだので「みなとの祭」となったのであり、港に関連した祭りを計画したわけではなかった。

ところがこの計画は、上海事変勃発により延期になる。4月2日に開催された観光委員会で、「上海事変のなりゆきなり一般的な情勢に鑑み、この際遠慮して適当の時機を待つ方がよからうというに傾いた」（『神戸又新日報』1932.4.3）と、ひとまず延期になったのである。

この計画が再度具体化するのは1933年1月のことである。1月12日の新聞記事によれば、開催理由は、「新満州国家も成立したのみでなく国内はインフレ景気で漸く活気付いて来たのでこの際威勢よく市民祭を執行しよう」（『神戸又新日報』1933.1.12）というものであった。「景気づけ」が挙行の最大の理由だったのである。また、記事には観光係による内容案が次のように紹介されていた。「予算は約九千円の見込み、祭事の次第は山の神（大山津見神）海の神（綿津見神）を祭神として第一日目は午後一時から大倉山に山神の祭事を行い各町から練り込んだ山車をここから市内目貫の道路にねり出させ、二日目は海神祭で大倉山から兵庫埋立地に練り出しここで厳かな神事を行ってのち海神乗船港内を巡行して正午還行同所で一大祝賀の宴を張ってから順次湊川公園に進行して解散の予定次第である。もちろん両日とも花電車の運転、打ち揚げ花火でウンとお祭気分を煽ろうという計画である」（『神戸又新日報』1933.1.12）。

この案は18日の観光委員会で審議され、計画

が具体化していく。その席で、組織については主催を市民祭協会として、市長を委員長、知事と商工会議所会頭を顧問とし、委員には市議、会議所議員、市部県議、縣市各課長、区長、警察署長、神職会長、各同業組合長、衛生組合連合会長、各新聞社長、外人代表者、青年団代表、その他関係有力者を取り込むこと、経費は9,000円で、会議費500円、計画費500円、式典費3,000円、祭事費4,000円、予備費500円とすること等が決定した（『神戸又新日報』1933.1.19）。

祭りの主催団体となる「市民祭協会」は7月に結成された。会長には市長が就任し、事務所は市役所秘書課内に置かれたことからわかるように、実務は市役所を中心に進められていく。

祭りの日程については、神戸市の「記念日」との整合性が意識される。1月の段階で市観光係には、

- ・5月23, 24両日（慶応3年兵庫開港勅許日）
- ・6月6, 7両日（慶応3年兵庫開港勅許布告日）
- ・9月16, 17両日

の3案があったという（『神戸又新日報』1933.1.12）。

また神戸市民祭協会理事会の初総会での質疑では、日程候補として、

- ・福原遷都（治承4年6月2日）
- ・楠公戦没の日（延元元年5月27日）
- ・兵庫開港（慶応3年12月7日）
- ・神戸築港起工式（明治40年9月16日）

が候補に挙がったという。しかし結局、「他の祭典とぶつからぬこと、および季節関係等も参酌して兵庫開港記念日を一月繰上げ菊花薫る十一月七八の両日とした」（『神戸新聞』1933.8.5）という日程に決定した。ただし同記事には「十一月七、八日というと少し遅過ぎはせぬか、一ヶ月位繰り上げた方が気候がいいじゃないか——実は十月十七、八日と思っていたのだが恰も長田神社の祭典とぶつかるとの強硬な抗議があったから変更した」という裏話が記されていることからわかるように、日付をめぐる「故事付け」は後知恵の感がなくもない。

このことに関連して、祭りの目的も、例えば祭

り終了後の11月に主催者が発行した写真集には次のように記されている。「慶応三年十二月七日兵庫港が開港されて以来本年まで六十六年、此の半世紀の間に今日の国際的海港都市大神戸を謳われることになった。本市では神祇の恩沢に報謝し、日本特有の敬神尊祖の美風を涵養し、併せて愛市観念の普及と愛港精神の徹底を計り以て我が神戸市の繁栄を企図する目的で、本年から毎年菊薫る十一月七、八両日に神戸市民祭『みなとの祭』を挙行することになった」〔神戸市民祭協会、1933〕。

このように、いわば祭りの公式記録ともいふべき書物では、「神祇の恩沢に報謝し、日本特有の敬神尊祖の美風を涵養」という文言がまず掲げられ、「愛市観念の普及と愛港精神の徹底」が続き、最後に「神戸市の繁栄を企図」が挙げられている。実際の意図は最後の点にあったことは言うまでもないが、祭りとしての形式を整えるためには、このような記述になってしまうのは致し方ないところであった。

2. 第1回の主催行事

次に、祭りの内容を細かく見てみよう。みなとの祭りはさまざまな行事から構成されている。元々が景気づけを目的とした行事であるために、手段は何でもよく、結果的に実に多様な行事の寄せ集めになっている。

まず、市民祭協会の主催行事を表5にまとめた。

表5 第1回みなとの祭

第1日（11月7日）

- ・神事祭典（大倉山公園）
- ・祭の女王戴冠式（兵庫突堤）
- ・国際大行進（市内）
- ・神戸ナイト（海上提灯行列）
- ・音楽演奏（湊川公園、外人劇場）
- ・学校児童生徒体操大会、旗行列
- ・市民大祝賀会

第2日（11月8日）

- ・懐古行列
- ・スポーツ大会

二日間に亘る行事

- ・菊花展覧会
- ・花電車
- ・市内装飾
- ・港湾巡覧

このうち国際大行進と懐古行列が「二大行列」と呼ばれ、祭りの目玉であった。国際大行進は、第1日の11月7日に、44台の自動車を飾り立て、東西に細長く延びる神戸市域を往復する、約3時間のパレードであった。「祭りの女王」が先頭の2台に分乗し、続いて神戸在住外国人の花自動車が14台参加、さらにさまざまに装飾を施した花自動車が続いた。これは「国際都市」神戸をアピールする格好の行事となった。

次に懐古行列は、神戸の歴史を示す時代行列である。「第1部 福原遷都から一の谷合戦まで」「第2部 大楠公の聖駕奉迎」「第3部 兵庫開港」という構成で、11月8日午後4時にわたって総勢550名が市内を練り歩いた。京都の時代祭や染織祭を参考にしたと思われるが、都市の歴史を人物のパレードで示すというアイデアは、この時期にはすでにありふれたものになっていたと思われる。兵庫開港の部分に外国人も参加しているのが神戸らしい特徴であった。

祭の女王戴冠式は、市内8区から1人ずつ選んだ女王候補のうち1人を女王として選ぶという、ミスコンテスト風の行事である。まず各区代表については、次のように選考したという。「市民祭協会から各区役所へ所謂厳密裡に命令が飛び女王となる資格ある女性——その簡条書を示すに、一、容姿体格均整を保つこと、一、善良な家庭の淑女にして名誉の奉仕に適すること、一、年齢は満十八歳以上二十二歳まで、一、身長百五十五センチメートル（約五尺一寸）という条件付きだ。そこで各区長が女王詮衡委員となってこれがピックアップになみなみならぬ苦心を払ったことはいうまでもない」（『神戸又新日報』1933.11.7）。そして各区から選ばれた8人の候補者のうちから1人を抽選で「女王」に選んだ。この行事の実施に当たっては、市民祭協会の実行委員会でも賛否両論あったようで、『『みなとの祭』の呼び物の一として最も期待をかけられている『クイン・オブ・コウベ』の選定については古宇田高工校長あたりから反対の意見出で、選定方法についても相当議論が出たが、他都市の模倣では駄目であり少なくとも人気を集める呼び物として名称は仮りに『祭りの女神』

でもいいとして市内第一の麗人を選定することは面白いとの意見多く」（『神戸新聞』1933.8.15）という記事からも、そのあたりの錯綜ぶりが伺える。全国で最初にこうした行事を取り入れた祭りと推測されるが、「善良な家庭の淑女」と家柄が考慮される点で、いわゆるミスコンテストとは趣を異にする行事であった。

その他の行事は以下のような内容である。まず神事祭典は、大倉山公園に、神戸市内に鎮座する99の神々を奉斎する祭殿を設けて神事を挙げるというものである。神社祭礼ではあるが、個々の神社の枠を超え、神戸市という行政区域内の神々をすべて1カ所に集めて行った。神戸ナイトは港での行事で、防波堤での打上花火、仕掛花火、提灯で飾った船の行列、さらに碇泊している船は電飾で飾り、夜の湾内を光で一杯にするというものである。音楽演奏は、湊川公園と外人劇場で開催された音楽会で、海軍軍楽隊と市民管弦団が演奏した。学校児童生徒体操大会は、旧関西学院跡と市民運動場に、市内の小中学校の生徒約2万8千人が集まり体操をした。各学校と会場との往復の際に、みなと祭の旗を掲げて歩いたのが旗行列である。菊花展覧会は、愛好家から出品を募り、大倉山公園と湊川公園で実施した。花電車は、市内のデパート等をスポンサーに装飾した市電を走らせたもので、夜は照明で彩られた電車が人気を集めた。市内装飾は、商店街の飾り付けだけでなく、夜は市内の高層建築物、突堤、沿岸の倉庫、背山一帯にイルミネーションを施し、「光の神戸」を現出させようとした。港湾巡覧は、港湾関係団体が汽船に市民を無料で乗船させて港内を一周した。

3. その他の行事

以上が市民祭協会主催行事であるが、行事はこれだけではなかった。まず、神戸の2つの地方新聞社が似たような行事を主催して覇を競った。

その1つが民謡である。1933年は、7月に発売された「東京音頭」（西条八十作詞、中山晋平作曲）が東京だけでなく全国でブームを呼んだ。これは歌の流行だけでなく、踊りがブームになったのが特徴で、全国各地で、広場に人を集めては

「東京音頭大会」が開催された。神戸でも、当時の新聞には東京音頭大会の開催を告げる広告が見られる。このブームに追隨して、全国各地で「ご当地」民謡が作られる。そして神戸でも、みなとの祭に合わせて2つの民謡が発売された。1つは『神戸新聞』の企画による「みなとの祭」で、「東京音頭」の作詞者である西条八十に作詞を依頼し、佐々紅華の作曲でコロムビアレコードが発売した。また主催者からは「神戸市民祭協会推奨」というお墨付きを得ていた。もう1つは『神戸又新日報』の「みなと音頭」で、同社の特選歌であり、「神戸市民祭協会公式推薦」を売り物にタイヘイレコードから発売された。両新聞社とも頻繁に「舞踊実演会」を開催するとともに、その模様を記事にして、自社の歌と踊りの普及に努めた。

また、2つの新聞社はそれぞれ芸妓を祭りに参加させた。『神戸又新日報』は「福原太夫行列」を主催した。これに対し『神戸新聞』は、「神戸三検番美妓神前演奏」を主催した。これは市内三検番（神戸中検、新中検、福原共立検）の芸妓75名が大倉山公園の祭壇前特設舞台で、舞踊、演奏の競演を行うというものである（『神戸新聞』1933.9.23）。主催者が「善良な家庭の淑女」から「祭の女王」を選んだのに対し、新聞社が芸妓を担ぎ出したギャップが興味深い。

なお、『神戸新聞』はさらに「商工祭」をも企画した。これは1930年の博覧会の際に神戸新聞主催で行われた仮装パレードであるが、この段階で1930年の行事を「第1回」とし、みなとの祭の中で第2回を開催することとした。内容は商店に参加を呼びかけた仮装パレードであり、第2日に約300名の参加で市内を練り歩いた。

さて、みなとの祭の内容はこれだけではなかった。主催者とは無関係に、地域や職場のさまざまな団体、市民有志が自発的に出し物を企画し、街に練り出したのであった。

あくまでも自発的参加であり、数が多いためその全容を把握することは困難であるが、出し物の主な内容は踊りと仮装で、一部地区ではそれに屋台とだんじりが加わったようだ。こうした団体は、思い思いに街を練り歩いたり、各所に設けられた

舞台で出し物を披露したり、あるいは新聞社などに「踊り込」んだ。翌年以降の資料であるが、1936年には、『神戸又新日報』の祭り前日の紙面に「本社ではみなとの祭りの期間中、本社来訪の二百団体に対し聊か慶祝の微意を表するため美しい優勝旗を贈呈することとなった」（『神戸又新日報』1936.11.5）という記事があり、実数は不明だが200団体近くの訪問を予想していたことがわかる。一方、『神戸新聞』11月8日付には「本社訪問の仮装隊」として10団体、9日付には、「本社来訪踊り連」として62団体が列挙してある。

なお、仮装の内容について、市と県警との打ち合わせを報じる新聞記事に次のような内容がある。「各町団体が催す仮装行列、催しものはみなと祭の催しの趣旨に悖る神戸の面目を失墜するが如き極端なエロ、グロものや卑猥なものは許さないが港繁栄のためには幾分取締りに手心を加える点に就いても打合わせするところがあった」（『神戸新聞』1933.9.29）。また翌年にも、県警の取締対策を報道する新聞記事の中に「仮装行列その他の風紀取締り」の項目があり、「昨年の例に徴し仮装して練り歩く連中で祭と酒のカクテルに陶酔し、お互いに仮装した気強さから風紀上或いはけしからぬ場面をよく見るので保安課では団体的統制のない個人の仮装しての一人歩きや、挑発的な女の女装、女の男装も禁止し充分取締ることになっている」（『神戸又新日報』1934.11.3）という記事があった。こうしてみると、「エロ、グロものや卑猥なもの」は極端な例であるにしても、それが決して例外ではなかったことが推測される。

以上からわかるように、第1回みなとの祭は、2つの神なきパレードを中心に構成され、特に自動車を飾り立てたパレードが特徴であった。さらには、当時流行の「音頭」が取り込まれ、市民も踊りや仮装で趣向を凝らした。そしてマスメディアが、自社イベントを中心に行事を好意的に報道し、祝祭性をさらに増幅していった。

4. 第2回以降

翌年以降の様子を、いちいち出典は述べないが新聞記事から簡単に紹介しよう。1934年の第2

回は、祭の期間を1日延長して3日間とし、初日（11月6日）に市内各神社で「宵宮祭」を挙げた。2日目（11月7日）は湊川公園勸業館前で神事祭典を行い、8区から選ばれた「祭のプリンセス」が玉串奉奠を行い、8人の「舞姫」が神楽を奉納した。第1回に行われた「祭の女王の戴冠式」はなくなった。国際大行進は東遊園地を出発点に、祭のプリンセス、舞姫を先頭に市内を循環した。夜には「神戸ナイト」が行われ、花火と電飾で神戸港を装飾した。また、この日に神戸港に入港した船舶のうち、最遠距離から入港した船と、神戸港に上陸する最多船客数の外国船・日本船に記念品を贈呈した。3日目（11月8日）は、湊川公園で神事祭典が行われたが、その中で「物故先人の威徳を景仰するため」[神戸市民祭協会、1934] 慰霊祭を神道式で挙げた。懐古行列は前年同様に行われた。このほか3日間にわたり、花電車と花自動車が市内を廻り、打上花火や船舶の装飾が行われたほか、各地で出し物が繰り広げられた。このほか大倉山公園で11月1日から20日まで菊花展覧会と菊人形館が開催された。このように盛り沢山の行事があったが、直前の室戸台風の被害で、盛り上がりにも影響が出た。

1935年の第3回からは、二大行列を隔年開催とし（この年は休み）、市内8つの区役所が行事を企画運営することになった。各区主催行事としては、地方舞台、仮装行列、旗行列、児童行列、町内装飾などが行われた。市民祭協会の主催行事としては、第1日（11月6日）は、市内各神社で宵宮祭を挙げた。第2日（11月7日）は、東遊園地に市内の全神祇を奉斎する祭殿を設けて祭典を挙げ、8名の舞姫が舞楽を奏した。またみなとの祭体育会競技優勝者を表彰した。また、この年から「幣流しの儀」を行うことになり、東遊園地から出発した行列が兵庫第一突堤に至り、幣を流して港の繁栄と航海安全を祈った。また、この日に入港した船のうち、神戸港上陸最多数の船客を乗船させた船、最高年齢の船長が乗船する外国船に記念品を贈呈した。第3日（11月8日）は、東遊園地式場で神事祭典と慰霊祭を行い、行列を作って第五突堤に至り、幣流しの儀を執り行っ

た。また、3日間、打上花火、花電車、イルミネーション、市内装飾が行われた。湊川公園では11月1日から25日まで菊花展覧会と菊人形館が設けられ、30万人が入場した。

第4回の1936年は二大行事が盛大に行われた。国際大行進では、参加14か国がそれぞれ女性代表を選出してパレードに参加し、多様な国の参加を強調した。

しかし、1937年7月の蘆溝橋事件から日中戦争が本格化したため、この年からは神事だけを10月20～22日に行った。みなとの祭が本格的に復活するのは戦後のことである。

そこで次に、変化の細部を検討しながら、変化の方向性を明らかにしてみよう。

第1は、神事を強調し、神社祭礼の要素を増やそうとする動きである。

第1回のみなどの祭では、行事の初日、大倉山公園に市内99の神々を奉斎する祭殿を設けて、神事祭典を行った。この行事は、場所を変えながら第4回まで継続する。これに加えて、第2回からは、まず祭の期間が1日延長されて3日間になり、初日には市内の各神社で「宵宮祭」が挙行された。また3日目には、慰霊祭が神道式で挙行されたが、その目的は「物故先人の威徳を景仰するため」[神戸市民祭協会、1934]であった。さらに第3回からは、2日目と3日目の2回、「幣流しの儀」を行った。これは港で幣を流し、港の繁栄と航海安全を祈るというものであった。このように神道の儀礼を取り入れていったが、これらは決して中心的な行事にならなかったことは強調しておきたい。

第2は、国際性の強調である。みなとの祭の中心行事は「二大行列」と呼ばれた国際大行進と懐古行列である。この2つの行列には、神戸の特徴として国際性を強調しようとする動きが見られた。具体的には、国際大行進の場合、第4回には各国を代表する女性を選出してパレードに参加するという演出をした。また懐古行列では、兵庫開港の行列に加わる外国人が徐々に増加した。

第3は、祭りのシンボルとなる女性をめぐる動きである。第1回で好評を博した「港の女王」は

(プリンセスと呼ばれることも多かった)第2回も選出されるが、この年には同時に8人の「舞姫」も選出された。また、第1回は女王が冠と杖を受け取る「戴冠式」が行われたが、第2回以降なくなり、代わって玉串奉奠を執り行った。第3,4回は港の女王がなくなり、舞姫だけの選出になった。一方で第4回には、国際大行進に参加する14か国がそれぞれ代表となる女性を選出して、パレードに参加する形を取ったため、日本代表の女性が1名選出された。このように、「女王」といった外国風の内容は2回だけで廃止された。

第4章 その他の祭り

本稿では京阪神の3つの新しい祭りを紹介したが、決してこれらは特異な試みとして突出した存在ではなく、他にも同じような祭りが存在した。

神戸では、1930年9月21日に「商工祭」が行われた。これは10月に神戸沖で開かれた海軍の観艦式を記念して9月から「観艦式記念大海港博覧会」が開催され、それを祝う行事として神戸新聞が企画した。内容は、「商工祭」の神事を博覧会場で行った後、市内を「広告仮装行列」がパレードした。これは市内商店による趣向を凝らした宣伝パレードで、自動車、自転車、荷車、屋台、徒歩などさまざまな乗り物の混成行列であった。『神戸新聞』9月21日付には参加75団体の名が掲載されている。『神戸新聞』紙上ではその盛大な様子を強調し、商工大臣、知事、市長、商工会議所会頭の祝辞も掲載している。しかしライバル紙である『神戸又新日報』には商工祭の記事が皆無であり、この企てを完全に黙殺している。一新聞社によるイベントがはたしてどの程度の影響力を持ち得たかは、他の資料から検証する必要があることは言うまでもない。

この神戸の商工祭は、1回限りでひとまず終わるかに見えたが、先に述べたとおり1933年のみなとの祭で第2回が実施された。

また神戸では、1936年と37年の5月に「商業祭」が開催された。これは神戸商店連盟が主催するものである。その中に「広告自動車パレード」

があり、神戸のみなどの祭で見られたようなパレードがここにも登場した。

大阪では、1932年から「港の祭」が行われた。神戸の同名の行事より1年早く始まったが、内容は港湾に限定した祭りであった。また、大津でも1932年4月に「商業祭」が行われていた。

このように、本稿で取り上げた3つの祭りは、規模の点では突出しているものの決して珍しい祭りではなく、小規模のものは各地で行われていたのである。

おわりに

ここまで3つの祭りを紹介してきたが、最後に特徴をまとめてみたい。

第1に、どの祭りも最初に神事を行い、その後時代行列などの娯楽の行事を行うという構成になっている。すなわち神事プラス付祭という、神社祭礼と同じ構成を取っている。

第2に、神事は特設会場に神職を招いて行っており、特定の神社で行ってはいない。神事での祭祀対象は、京都が染織業の祖神、大阪が先覚者たち、神戸が市内全域の神々というふうに変化している。

第3に、どの祭りでも時代行列が中心となっている。当時の祭りでは、団体ごとに趣向を凝らし、仮装や踊りを楽しむというような小規模な出し物も数多く見られたが、そちらが「演じる」ことを楽しんでいるのに対し、主催者が「見せる」ことを重視して選んだ出し物が時代行列である。また、一般的な仮装は、即興性・話題性を重視するため、毎年同じ仮装に扮するのは適当でない。その点で時代行列は、毎年同じ内容で実施しても鑑賞に耐えうるとみなされたのであろう。また、都市の歴史上の人物の行列は、市民共通の「祖先」を示すことになると考えたのかもしれない。そして、それらの手本として京都の時代祭がすでにあり、京都には時代考証ができる専門家集団と、衣装を製作できる技術があった（神戸は不明だが、大阪は京都に制作を依頼している）。

第4に、大阪と神戸では自動車による大規模なパレードがあった。行政区域内全域に祭りの賑わいを広げる手段として、この時期に飾り立てた自動車パレードが登場した。もちろん、市電を飾った「花電車」は以前から存在したが、自動車による大規模パレードは、この時期から各地に広がっていくように思われる。

第5に、景気づけという側面も非常に重要であった。京都が染織業振興、大阪が商工業振興を表に出し、神戸は表向きそれを謳ってはいないが、準備段階での新聞記事にあったように、このことが十分に意識されていたのである。

以上、本稿では昭和初期の新しい祭りとして3つの祭りを紹介し、その特徴を考察した。次は、なぜこのような祭りが同時発生したか、その点を明らかにしていきたいと考えている。

参考文献

- 阿部環 1981「博覧会と神戸市」『神戸市史紀要 神戸の歴史』2
- 京都市編 1981『史料 京都の歴史4 市街・生業』平凡社
- 京都商工会議所 1931「京都経済日誌 二月中」『京都経済時報』1-12, 京都商工会議所
- 神戸市民祭協会 1933『神戸みなとの祭 第10回・昭和八年十一月七・八両日』神戸市民祭協会
- 神戸市民祭協会 1934『みなとの祭写真帖』(昭和9年) 神戸市民祭協会
- 神戸市民祭協会 1935『みなとの祭写真帖』(昭和10年) 神戸市民祭協会
- 新修神戸市史編集委員会 2005『新修神戸市史 行政編Ⅱ』神戸市
- 関保之助・猪熊浅麻呂・出雲路通次郎・猪飼嘯谷 1933『歴代服装図録 1』歴代服装図録刊行会
- 高橋眞一 1944『京都商工会議所史』京都府商工経済会
- 高柳松一郎 1933『大阪商工祭記念誌』大阪商工祭協会
- 武田鼎一 1936『大阪商工祭記念誌 昭和十年度』大阪商工祭協会
- 藤井満彦 1936「大阪商工祭に就て」『大大阪』12-11
- 平安神宮百年史編纂委員会 1997『平安神宮百年史』平安神宮
- 山本花魂編 1931『グラフ染織祭』山本写真印刷